

第2章 議論の段階

1. 解決のアイデア出しと企画化の流れ

兵庫大学における「熟議」のメソッドには熟慮の段階を伴う。テーマに対して熟慮を行い、熟慮の結果を持ち寄ることによってはじめて議論が成り立つという前提に立つからである。

その上で、熟議の本番の議論の段階では、どのように議論を展開するのか、は重要な課題となる。本学の熟議手法でも同様であるが、しばしば用いられるグループワークは、課題を見出し解決のための議論を広げ、そして議論を収束させる中で、合意を得る過程を含むものである。これまで熟議は課題の表出とその解決を議論する、ということでグループワークを実施してきた。

「熟議 2016 in 兵庫大学」では、「今、大震災が加古川地域を襲ったら？」と課題は明確である。「熟議 2016 in 兵庫大学」での熟慮段階では、防災から復興に向けての流れに沿って解説をした。また講師が課題を出し、参加者は事前に考えることになっていた。これは熟慮の段階で、加古川地域が地震に襲われたことを想定してもらうためであった。これにより、いざ直面をした場合に、いかに被害を小さくするか、つまり減災のためのアイデアを出すことが可能になる。

さて、熟慮の段階でも示したように、災害への対応は、発災の以前からの備え、すなわち防災、そして発災から、避難、復旧と元の生活を被災者の多くが取り戻す、復興の終わりまでの期間での、各段階での対応が求められる。この段階別で、防災のためのアイデアは考えられるべきであろう。そこで、最初に、下記のような段階別での記載を行い、段階別に防災の、あるいは命を守るためのアイデアを出していく。「『減災』のためのアイデアを出し合おう！」とのテーマを議論の第一段階とする。

防災	発災	復旧	復興

3~5 つに絞ったアイデアについては「私たちの減災アイデアは〇〇〇〇です」というフリップにまとめる。それを紹介することで第一段階は終了する。

第二段階の内容を考えるにあたって、熟議プロジェクトチームの懸念の一つが、今回、高校生が参加者の主体となっているが、経験豊かな一般参加者、特にこの分野に関心の高い人々の中で、高校生が委

縮し意見を出せないことであった。高校生には、過去の経験に頼らない新たな視点と発想があり、それは年長者の参加者が経験に裏打ちされた、事実の延長とは異なる。課題の解決には、確かにひらめきに基づくような、若者ならではのものもある。しかし、それらが過去の事実からの指摘（それは一度やって失敗したことがある、など）により潰される懸念もあった。そこで、第二段階では、防災への関心の有無やその経験の長短を問わず可能なこと、つまり、出てきたアイデアを企画化する、という観点を含めた。企画化は解決策の応用であり、その企画には「防災グッズ」や防災に役立つ「アプリ」開発などむしろ高校生などの関心のあることも想定した。

3～5つのアイデアのうちどの企画を具体化していくかをグループで検討、1つを取り上げて具体的な企画書く、ということである。そして、第二段階のテーマを『「減災」のためのアイデアを具体的な企画にしよう！』とした。企画化ということは、実現可能な要件を付加して、形にすることであり、「どんな目的で」「誰が」「どんな風に」「どんな内容を」なのか、必要な情報を互いに共有しながら、形作っていった。それらを最後に発表するのである。

ところで、今回の議論の段階での特徴は、第2段階での「企画化」であろう。自治体や企業では、企画書づくりは特に珍しいことではないだろう。社会人であれば、何らかの事業を行う際に、その内容はさておき企画書は不可欠である。企画化の際には、事業目的の明確化や必要となる機材や人材、具体的な方法と予想される困難や阻害要因とそれの解決策、時には他の方法と比較しての優位性（コストや失敗リスクなど）を明確にしなければならない。

高校生では、——生徒会の役員であれば、生徒会活動の企画書を作成する、ということはあるが——通常の授業等でなかなか企画書を作る機会にはない。企画書に不慣れであることを想定して、第二段階では、メインファシリテーターが順を追って企画化の説明を行い、これを踏まえての議論を行った。とはいえ、慣れない者同士、グループで作成することは、実は相当高いハードルでもある。とはいえ、企画化の流れを学ぶことで、実際の課題解決をより具体的にイメージすることができるのではないか。

国や自治体の組織を見ると企画と名のつく部署は少なくない。企画を作るのは官僚の仕事、というようだ。政治家は方向性を示し、具体的な政策にするには、実現可能性を踏まえつつ着実に進む官僚が向いている、というのであろうか。政治家を選ぶ有権者は、政党が示すマニフェストや政治家個人が掲げる公約を単なる方向性として受け取っているのであろうか。恐らくは違うであろう。マニフェストや公約にある政策の多くは目標値を立てた実現可能な企画、と受け取っているのではないか。ところが達成時期や財源などの裏付けを含むマニフェストを出してきても、結局、実現できるものは限定されている。現在、マニフェストももはや検証が困難なほど、精緻化を欠いている。

その理由はさておき、主権者教育において企画化を学ぶことの意味はここにある。主権者教育の一環として、現実の課題解決の方法を企画しマニフェストを作成する（できればその評価も行う）、というのは魅力的なアイデアである。

2. 本章の構成

今回、議論の舞台となるテーブルであるが、参加者の人数を踏まえ A から J までを用意、それぞれのテーブルに集う参加者をグループとして扱うこととする。各グループは、大学生のファシリテーターが 1 名、高校生と大学生、及び社会人の参加者の 6～8 名により構成される。それぞれのグループにより若干の相違があるが、高校生と大学生が 5～6 名、社会人が 1～2 名という内訳で、いずれも若年者の方が多い構成である。

以下、本章では A から J で行われた 2 つの段階の議論、すなわち、第一段階での減災のアイデア出しにより議論を広げ——もちろん、闇雲に広げることが難しいために、熟慮段階での学びを活かし、防災から復興までの流れの中でのことだが——、そして第二段階でアイデアの絞り込みとその企画化についての成果でもあり、議論の過程でもある 2 種類の模造紙をグループ毎に掲げるとともに、絞ったアイデアをフリップに示している。その上で、熟議プロジェクトメンバーの観察等に基づく解説と、具体的な企画を記載する。グループで 2 つの段階の議論が見開きになるように配置しており、ページ上段に模造紙の写真を、下段には解説文を記載する。

なお、議論についてのまとめは、結論での考察に記載する。

(解説者 グループ A,B:米野吉則 C,D:小林洋司 E,J:中本淳 F,G:中井玲子 H,I:斎藤正寿)

Aグループ



【解説】

「減災」に向けたアイデアを出し合うでは、防災段階に集中する議論であった。発災段階や復旧、復興段階については少ないながらも意見が出されていた。4つの段階において減災に繋がるアイデアに着目して議論が展開された。結果的には「地域における情報の共有」や「人との関わり」、「家具の固定」に集約された。

＜防災段階＞ 避難訓練や防災イベントへの参加、防災についての授業の実施、防災士の育成、家具の固定、食料備蓄、スマホの電源確保、地震保険などソフト面、ハード面双方の意見が多く出された。

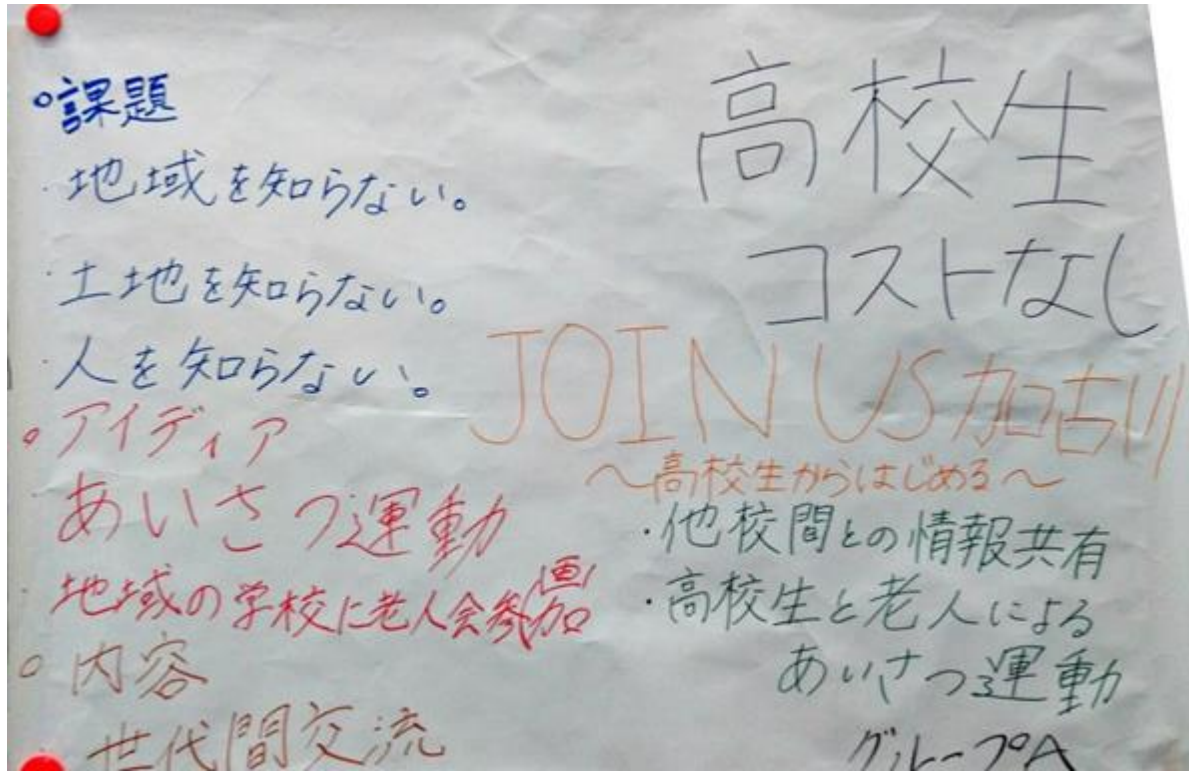
＜発災段階＞ 防災段階で議論された内容を土台に、発災段階では具体性、機能性を加味して議論されていた。例えば、避難訓練の実施(防災段階のアイデア→10名以下の集団で行動する(発災段階のアイデア)など。

＜復旧、復興段階＞ 他の地域コミュニティの交流、ボランティアへの参加など少ないながらも支援に向けた意見が多く出された。その中で、復旧や復興への支援は、地域特性を配慮するなど質的な支援が必要であり、そのために防災段階での地域交流、継続的な支援活動が効果的ではないかという議論がなされた。

私たち A グループの減災アイデアは、

- ◆人と話すことでストレスを貯めない
- ◆家具を固定する
- ◆地域を良く知り情報を共有する です。

Aグループ



【企画】 JOIN US 加古川 ~ 高校生からはじめる ~

前半の議論で集約されたアイデアのうち、「地域における情報の共有」と「人との関わり」をキーワードに企画案を作成していった。

防災、発災、復旧、復興の4つの段階に共通して「地域を知らない、土地を知らない、人を知らない」ことは、支援を実施する際の課題になるのではないかという議論がなされた。地域、土地、人の3つの「知らない」を「知る」に変えるためには、加古川地域に関わる人々が「仲間になろう、一緒にしよう」といった地域と関わり合う土壌を醸成する必要があると、意見がまとまった。

企画案としての具体的な意見は時間的な問題から十分ではなかったが、その中でも、「高校生はコストがかからない」という意見が出された。イベント企画としては、費用がかかることで二の足を踏んでしまう傾向にあり、実現されないリスクも高く、求める土壌作りにはつながらない。高校生は時間、体力ともにあふれているのではないかという意見から、高校生が挨拶運動や地域の老人会への参加などのイベントを主導することは、スピード感のある地域と関わり合う土壌を生み出せる効果的な方法ではないかという意見にまとまった。

Bグループ



【解説】

『減災』のために出された意見は、防災段階の視点が話題の中心であった。集約されたアイデアは、「高齢者(障害者)の体力強化」、「火災が起きた時のため池の活用」、「大学生や高校生や地域の人によるコミュニティを深める行事の実施」、「ヘリポート・食料保管ができる場所の確認」、「兵庫大学による救命講習」である。

＜防災段階＞ 高齢者や子どもを持つ家庭への対策、避難

所や避難ルートなど避難方法、家族や地域のコミュニケーション、家具の固定や自宅の耐震化とさまざまな立場から意見が出されていた。また、「人」でも高齢者や子供、障がい者、妊婦など様々な母集団を想定して避難困難者の支援に向けた議論がなされていた。

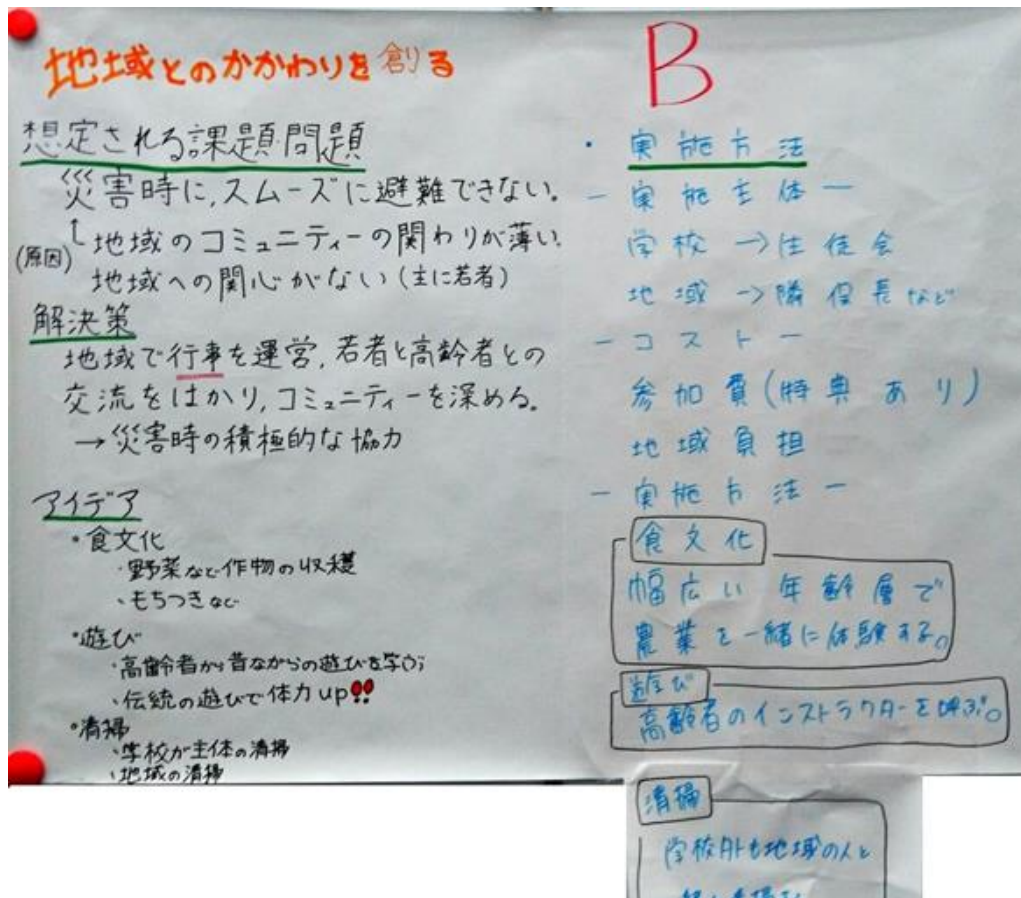
＜発災段階＞ 避難場所や経路の確実な確保として、「避難場所や経路にある建物は必ず耐震化にする」、「道路は割れにくいものにする」など、ハード面の意見が多く出された。

＜復旧、復興段階＞ 復旧や復興も含めたコミュニティでの自主防災組織や地域コミュニティの強化などの意見は出されたが、主に防災段階の議論であった。

私たちBグループの減災アイデアは

- ◆(障害者)高齢者の体力強化
- ◆火災が起きた時のため池の活用
- ◆大学生や高校生や地域の人によるコミュニティを深める行事などを行う。
- ◆ヘリポート・食料保管ができる場所の確認
- ◆兵庫大学による救命講習 です。

Bグループ



【企画】 地域とのかかわりを創る

企画の想定される課題として、地域コミュニティとの関わりが薄いことから災害時にスムーズに避難できないことを挙げた。また、具体的な対象としては、地域への関心が希薄である若者を想定し議論を進めた。アイデアとして、「食文化」「遊び」「清掃」の3つをキーワードに据えて実施方法や内容が議論された。具体的な方法としては、実施主体に「学校側 - 生徒会」、「地域側 - 隣保長」という意見が出され、主体を生徒会にすることで高校生の自主性や独立性を担保しようという議論になった。

コスト面では、参加費を徴収する、地域に負担をしてもらうなどの意見が出された。一方で参加を促す工夫として、参加特典を付けてみてはどうかという提案に対し、農業を体験したり、高齢者から伝承遊びを学んだり、地域の人と一緒に清掃するなどのアイデアが出された。その後、参加促す工夫について議論を深め、野菜の収穫体験、高齢者との遊びを通して体力アップが望めるといった具体的な意見が出た。

結果、地域がきれいになることで感謝されるなど、参加することで「楽しい、うれしい」といった感情を共有できそうな場を提供する必要があるのではないかと考えた。それが地域とのかかわりを深めるうえで有効であるという結論にいたった。

Cグループ



【解説】

「防災」「発災」「復旧」「復興」のなかで防災の部分に関する意見が多かった。大学生と一般参加者が積極的に意見を出しているグループで、避難が困難な人を若い人々が助ける仕組みづくり、ボランティアを受け入れる仕組みづくりをはじめ避難訓練の実施や避難所を把握するマップづくりと

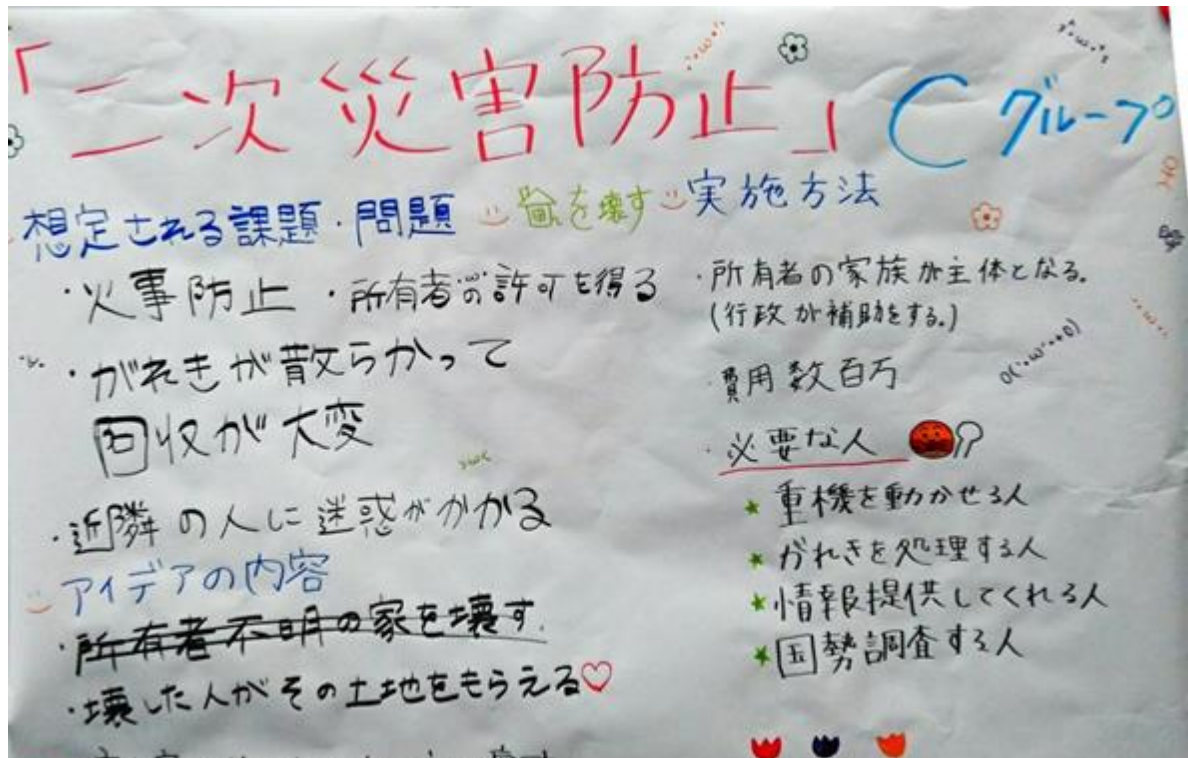
いったソフト面のアイデアから、避難所の増設、公衆電話の確認、津波対策等ハード面のアイデアが出されていたが、概ね起こりうる出来事を想定した準備というニュアンスの強い意見が多く見られた。

また、前半の議論の最中にはあらゆる意見が「行政の協力・行政の責任」という結論に陥りがちな時間帯があり、参加者の中での議論の前提が異なる現状が見えた。前半の議論の中でも、特徴的な意見としては若年層ならではの VR（バーチャルリアリティ）を使った事前シミュレーションのアイデア、所有者不明の家を壊すという捉え方によっては斬新な意見が散見された。以上の意見のなかから、避難所での子どもの遊び場づくり、避難が困難な人を若い人々が助ける仕組みづくり、所有者不明の家を壊す、学外での避難訓練が議論の末、減災アイデアとして提案されていた。

私たちCグループの減災アイデアは

- ◆避難所での子どもたちの遊び場を作ること
 - ◆避難が困難な人を若い力で助ける仕組みづくり
 - ◆所有者不明の家を壊すこと
 - ◆学外での避難訓練
- です。

Cグループ



【企画】二次災害防止

議論の後半では、二次災害の防止に論点を絞った上で議論が展開されていた。前半の議論のなかで提起された4つの減災アイデアのなかから「所有者不明の空き家を壊す」というアイデアに着目し、このテーマを展開して「空き家の解体を含めた管理」の重要性を強調する企画が練られることとなった。現実的に考えると、所有権の問題はもとより、費用、空き家解体時に生じる瓦礫の処分や専門的な知識を持った人々の協力等の多くの問題がある。こうした問題を解決するにあたって前半の議論の中でみられた傾向と同じく「結局行政にやってもらわないといけないことがある」という意見が強くなってしまいうきらいがあった。なかなか、このアイデアを深めていく議論まではできなかったが、「防災」「発災」時の対策として空き家の問題を取り上げること自体には意義があるように思われた。もうすこし、現実とのすり合わせを行うことができれば、重要な活動につながる可能性を秘めていると思われる。

Dグループ



【解説】

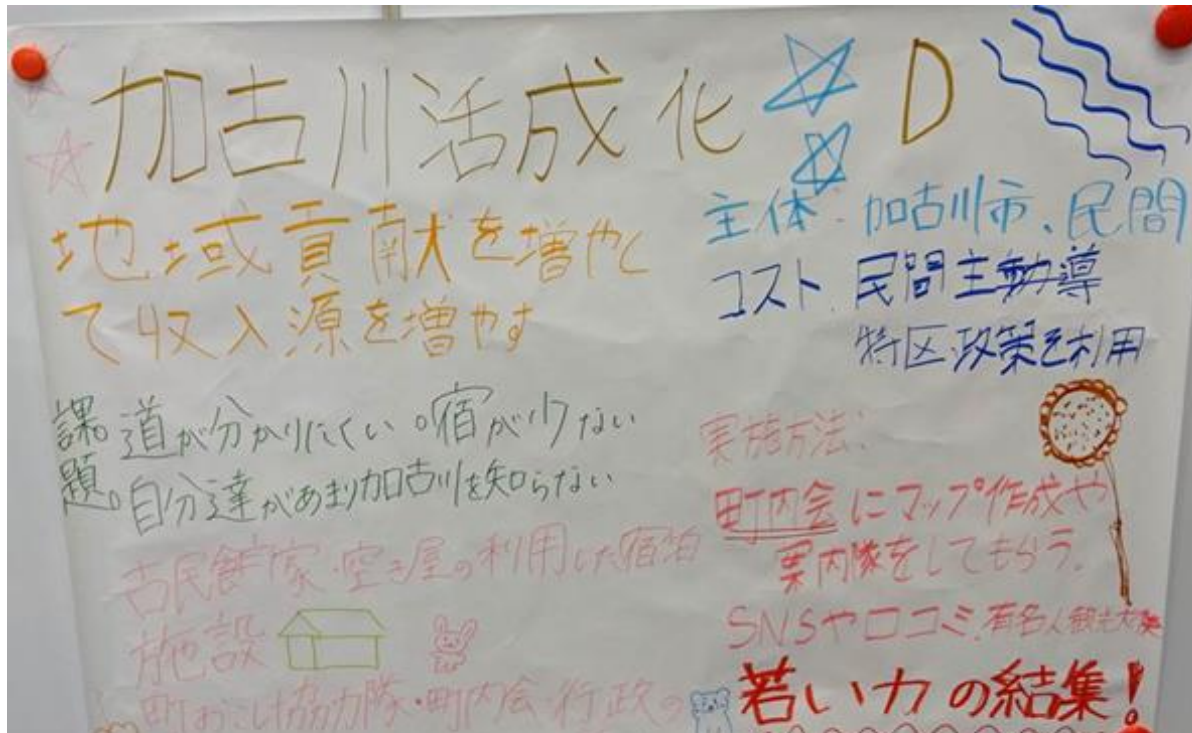
Dグループでは非常に現実的な議論が交わされた印象である。熟慮の段階の学習や、高校内外で学んだ情報に根ざした高校生参加者の積極的な情報提供等を通してCグループと同様「防災」「発災」を中心とした意見が熟議の前半では出しあわれた。そのなかでも注目される意見としては人工透析の設備の充実などの災害時の医療施設の整備や、個人単位、地域単位での物資備蓄や、物資の運搬の観点から加古川地域の道路を考えるにあたって、日頃から非常に狭く、交通量の多い道路が災害時に見て機能するかどうかの問題、兵庫県がシェルターをつくるといったハード面での情報が挙げられた。そしてまた、それらを整備するための財源の問題などが議論されていた。

こうした議論を受けて、減災アイデアとして①地域別の避難所ルールの作成、②地域貢献を増やして収入源を増やす③道の整備④地域住民のコミュニケーションの一環として事前学習を行い、ルートの確認と連絡手段の取り決めを行うといった項目にまとめられていた。

私たちDグループの減災アイデアは

- ◆地域別の避難所ルール作成
- ◆地域貢献を増やして収入源を増やす
- ◆道の整備
- ◆コミュニケーションの一環として事前学習を行い、ルートの確認と連絡手段の取り決めを行う です。

Dグループ



【企画】 加古川活性化

後半の議論では「復旧」の段階に着目したうえで加古川地域の活性化を図るということをテーマに議論が進行した。大きな地震に見舞われたとき、復旧から復興を目指していく中で復旧・復興に必要な経済的な基盤となる「収入源」の確保の仕方に議論が集約されていた。Dグループの議論は、前半の議論でも色々アイデアを出し合ってその実現可能性を考えるのはよいが、それをどのように実質化していくかという部分で停滞する節があった。そうした問題の解決をはかろうとするとき、経済的な部分が日常的に活性化していなければうまくいかない、ということで企画案としては「加古川活性化」が選択されることとなった。具体的には地域の観光資源に着目し、また住民自身が地域を知り、地域に貢献する機会を増やしながら、地域レベルでの収入を増やしていく。その増加を復旧に反映させようとするアイデアである。Cグループと同様空き家に注目しながらもCグループとは異なり空き家を壊すのではなく、宿泊施設として利用するアイデアが出されたり、町おこしのための各世代の力の結集などが提案されたりした。

Eグループ



【解説】

比較的、発災時における対応を中心に議論が行われた。減災アイデアとして、「子供から大人ができる救急処置」「津波被害想定マップの作成」「水無しで飲める薬」「避難用の道路」「ボランティアの他県・他校との連携契約」の5つを取り上げることとなった。

＜防災段階＞ 日常的に個人ができることとして、地域の避難場所を事前に把握すること、必要なものをまとめておくこと、寝る場所に重たいものを置かないこと、ハザードマップの作成・確認などが挙げられた他、近所付き合いの重要性の指摘もあった。

＜発災段階＞

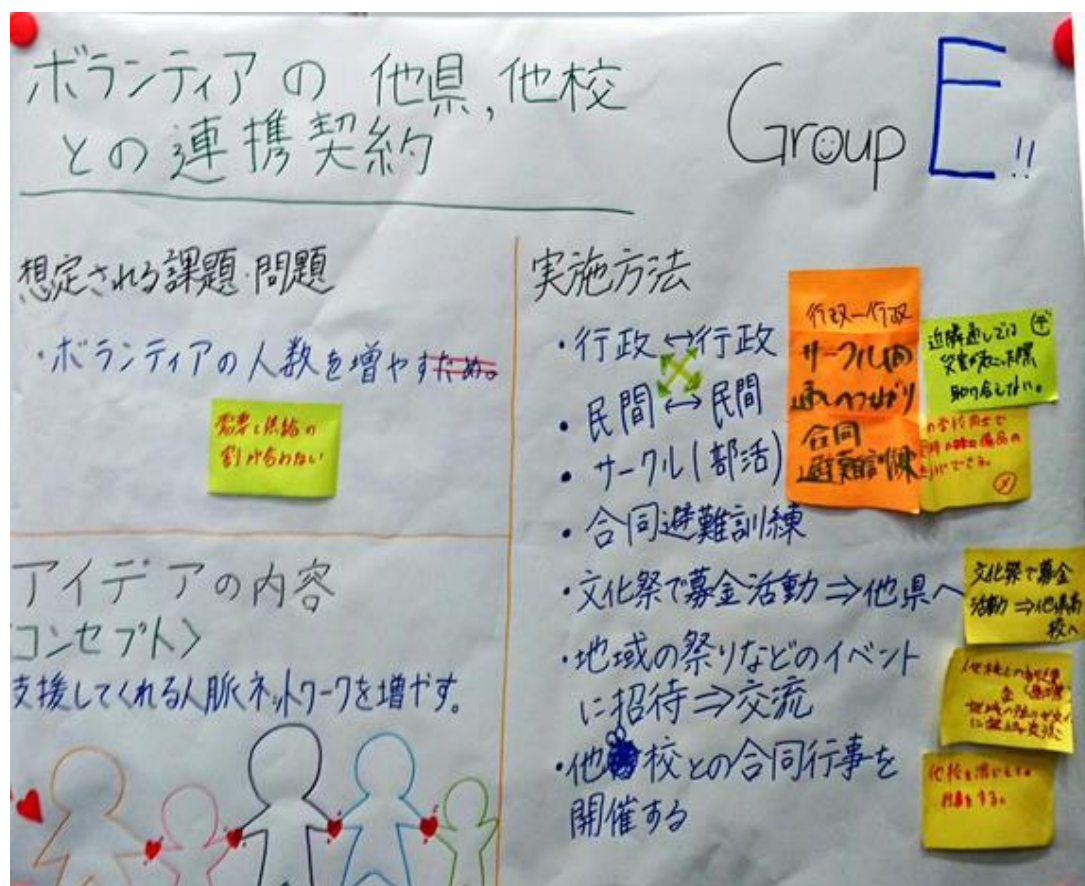
1. いつ発災するかわからないことから、夜間における避難訓練の提案があった。また、簡単な応急処置についての訓練が必要との指摘も。
2. 防災グッズとしてのスリッパの重要性に対する指摘の他、持病持ちの人のための薬の管理について懸念の声があがった。そうした薬が水なしで飲めるようになれば、との提案に。
3. ボランティアについて、他県や他校との連携によって、支援者を増やせないかとの提案。

＜復旧～復興段階＞ 心のケアによる二次災害の防止や、避難場所におけるコミュニケーションの難しさについての指摘があった。

私たちEグループの減災アイデアは

- ◆子供から大人ができる救急処置
- ◆海拔を表示した看板の増加 AND 津波被害想定マップの作成
- ◆水なしで飲める薬！
- ◆避難用の道路
- ◆ボランティアの他県、他校と連携契約です。

Eグループ



【企画】 ボランティアの他県、他校との連携契約

発災時におけるボランティア参加者の不足を解消するため、近隣地域を越えた県単位で連携し、支援側の人脈ネットワークを強化することを提案する。また避難所における正しい対応・対策を促すため、ボランティアの人材として、体力もあり活動的な高校生を参加させることも提案したい。避難場所における大声での伝達・誘導など、活躍できる場面も多いと思う。

具体的には、行政間や民間団体間でのつながりだけでなく、行政・民間団体のつながりを強化すること、地域の祭りのなどのイベントに招待することによる交流を図ることで人脈ネットワークの構築になるのではないかと。高校なら部活やサークル単位での関係を構築することや、他校との合同行事を開催すること等も可能だろう。また、小中高の学校や幼稚園・保育園での避難訓練を合同で行うことで、それぞれの備品などを非常時に共有できるのではないかと。

Fグループ



【解説】

防災段階から復興段階に及ぶ幅広い議論が展開された。

地域の連携、避難訓練、交通機関の安全対策の重要性という点に意見が集約していった。

「防災段階」については、次の通りである。

1. いざという時にいつでも避難できるように、必要なものを用意しておく他、新しい防災グッズの開発を希望する声も上がっていた。
2. 自宅だけでなく避難所の増強・耐震工事の必要性も指摘されていた。
3. 避難訓練実施の必要性は勿論のことであるが、その際には現状よりも更に実践的なプログラムが必要ではないかとの指摘があった。つまり自分達の実際の避難所がどこか日頃からきちんと確認しておくこと、学校・職場における避難経路や交通機関の状況を確認しておくといったことである。

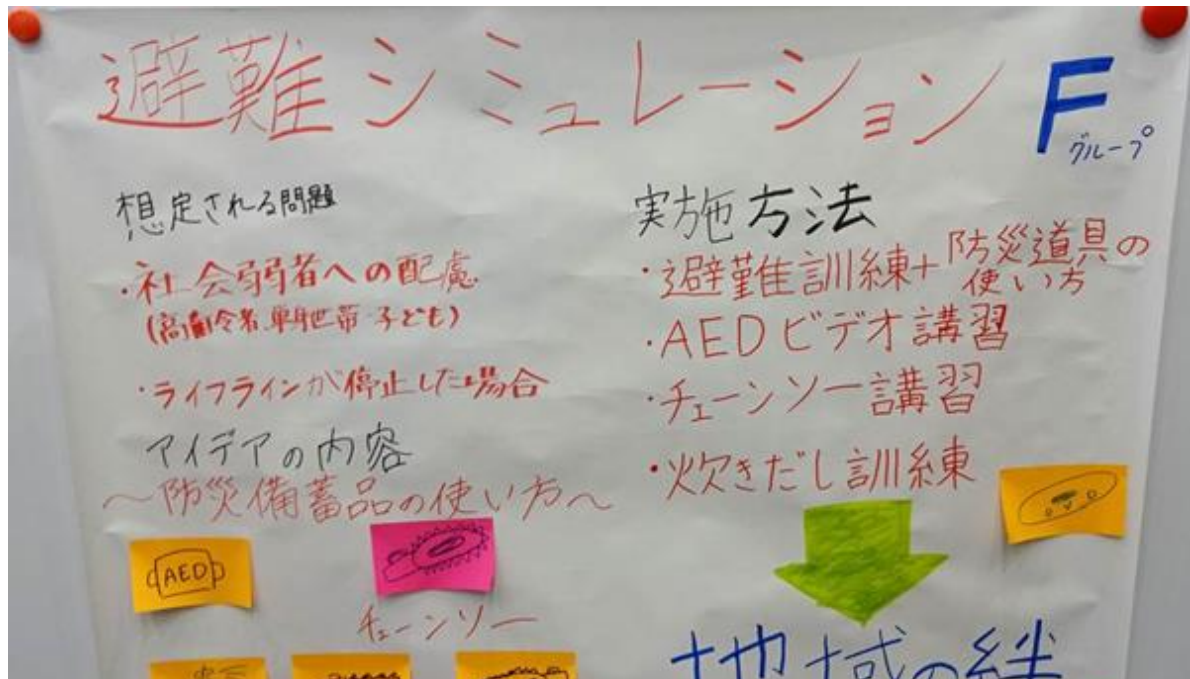
「発災段階」については、特に家族や友人の無事を確かめる為に、互いに如何に連絡を取り合うかということが話し合われていた。万が一、家族それぞれが違うところで被災しても、皆が集まる場所を前もって決めて約束しておくことが大切であること。また、ペットを飼っている場合には、ペットのことも考えておく必要性も指摘されていた。

「復旧～復興段階」については、ボランティアの知識を深め、いざという時に即戦力として動けるようにしておくことも大切であると意見が出されていた。また、避難所でもプライバシーにきちんと配慮された生活が送れるよう、心身とも負担が少しでも軽くなるよう、避難所での交流の促進についても話し合われていた。

私たちFグループの減災アイデアは
 ◆交通機関の安全対策
 ◆地域の連携
 ◆避難

です。

Fグループ



【企画】 避難シミュレーション

前半で議論された内容を元にアイデアが絞られ、最終的には企画案として「避難シミュレーション」が提案された。

メンバーの関心が高かったのは、特に次の2点である。

まず、社会弱者への配慮についてである。ここでいう社会的弱者とは、高齢者、単身世帯、子ども、障害者を指しており発災段階で逃げ遅れる危険性が高い。また、避難所生活における互いのプライバシー保護の問題についても真剣な議論が展開された。

次に、ライフラインの停止から復旧するまでの乗り越え方についてである。ライフラインが停止した場合、その緊急事態をしのぐには、様々なサバイバル・スキルが求められる。一般的な防災備蓄品やAED（自動体外式除細動器）、消火器のような防災道具は勿論のこと、被災地におけるチェーンソーの有効性についても、メンバーから紹介されていた。

このように様々な視点から議論を進めていく中で、市民が日頃からいつでも円滑に連携を取れる関係性を築いておくことこそが、非常時を皆で乗り越える為に必要な前提条件であろうとの意見の一致を見た。その為には、まずは自治会が主体となって地域の絆を深めること。その上で、これまでに挙げた様々な防災備蓄品等の使い方講習も取り入れた、避難訓練や炊き出し訓練などが、日常的に適宜実施されることが望ましい、と意見が集約された。

Gグループ



【解説】

特に防災段階における内容について議論が展開された。

次の5つキーワードについて意見が集約された。「生活に根ざした訓練」「備えあれば憂いなし」「心理」「コミュニケーション」「ボランティア」である。

この中で、特に議論が集中したのは「生活に根ざした訓練」の必要性についてである。関心が高かったのは、災害が「想定外」であるか「想定内」であるかということによって、必要な訓練は違うのではないかという点であった。現状では、各地域における防災訓練は「想定内」であるが、「想定外」の場合にまでどう備えるかという視点も大切であるとのことである。また、専門家であってもとっさにはうまく行動ができない現実もあるので、ハザードマップなどを身近なものにするといった取り組み等により意識を高めることのほか、色々な方面から取り組みが必要であろうということまで議論が及んでいた。

このほか、住まいの家財等の転倒防止や避難所の確認、食料・水の備えをしておくといった各自の「準備（備え）」に対する意識を持つことの大切さや、日頃から家族で話し合いをしておくこと、ご近所づきあい、地域の連携といったコミュニケーションの重要性についても議論が続いた。

私たちGグループの減災アイデアは

◆ボランティア

◆心理

◆生活に根ざした訓練

◆備えあれば憂いなし

◆コミュニケーション

です。

Gグループ



【企画】生活に根ざした訓練

前半で議論された内容を元にアイデアが絞られ、企画として「生活に根ざした訓練」が提案された。

メンバー間での議論では、現状として防災訓練がリアリティのない「訓練」であり、形骸化しているのではないかということが問題点として指摘されていた。その結果、「自主訓練」のハズが自主的とは到底言えるような状況ではなく、「やらされ感」「義務で仕方なく」といった雰囲気蔓延していて、人が集まりにくい状況となっている。

この状況を好転させる為には、つまり訓練内容が本当に実際に機能する為には、もっと参加者（対象者）の意欲・意識を刺激するような、一種の「バーチャルリアリティ」的なプログラムを開発する必要があるという。どうすれば積極性が高まるのかという点については、まずイメージを「明るく、楽しく」参加できるような工夫をする。例えば、家族で参加してもらえるような「オリエンテーション型」や「参加ポイントの提供」などがあれば、参加型として動員し易いというアイデアが提案された。

また、その実施方法についても様々な地域イベントのアイデアが提案されたが、中でも「(小学校の)マラソン大会」等で、休憩所を避難場所にしたり、避難経路をルートの一部に指定すると、より身近で有効な取り組みになるのではないかと意見がまとまった。

Hグループ



【解説】

前半の議論では、防災段階への関心が高く、多くの議論が集中した。とりわけ、

1. 非常食、救急用品等の備蓄をしっかりと行う。
2. 地域で防災意識を高める勉強会を開いたり、加古川市をあげて定期的に「防災・減災デー」を設けたりする。
3. 日常から地域の人々同士のコミュニケーションを活発にしたり、避難訓練や耐震補強を実施したりする。

の3点が具体的に議論された。

さらに復旧段階についても議論がなされた。特に、子どもや高齢者への心身のケアが大切であるとされ、ここでも具体的なプランが模索された。

私たちHグループの減災アイデアは

◆加古川市内で毎月〇日に防災・減災デーを！

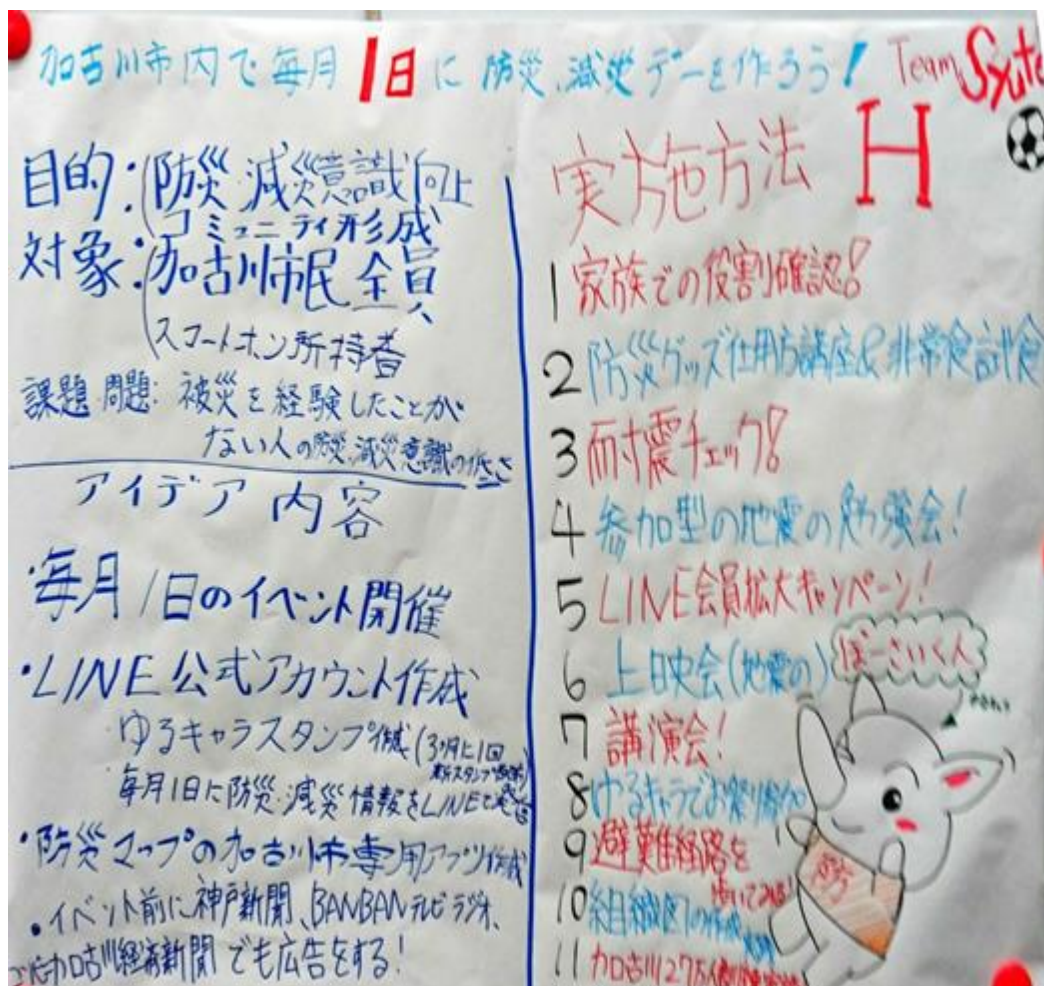
◆加古川の影響

◆子ども（社会的弱者）のケア

◆人とのつながり

です。

Hグループ



【企画】加古川市内で毎月1日に防災・減災デーを作ろう!

メンバーで議論を重ねた結果、前半で議論が集中した防災段階でのアイデアを集約して、「毎月1日を加古川市の防災・減災デーとしよう」という企画がまとまった。これは加古川市民の防災・減災意識を高めるために毎月実施されるもので、スマートフォン所持者が多数を占めるという現実を前提に、LINEの公式アカウントを作成し多くの情報を発信していくこと、ゆるキャラ(ぼーさいくん)スタンプを作成し認知度を向上させることが特徴である。内容は年に12回開催できることから、前半の議論で出た具体的なプランをすべて盛り込むこととしている。

Iグループ



【解説】

前半の議論では、防災段階及び発災段階への関心が高く、多くの議論が集中した。とりわけ、防災段階では

1. 非常食、救急用品等の備蓄をしっかりと行う。
2. 避難所及び避難経路を日頃から確認しておく、の2点が具体的に議論され、発災段階では、
3. 閉じ込められた際に助けを求めるための笛を配布する。
4. 避難所では、救援物資の公平な分配に配慮したり、ラジオ体操を取り入れる。

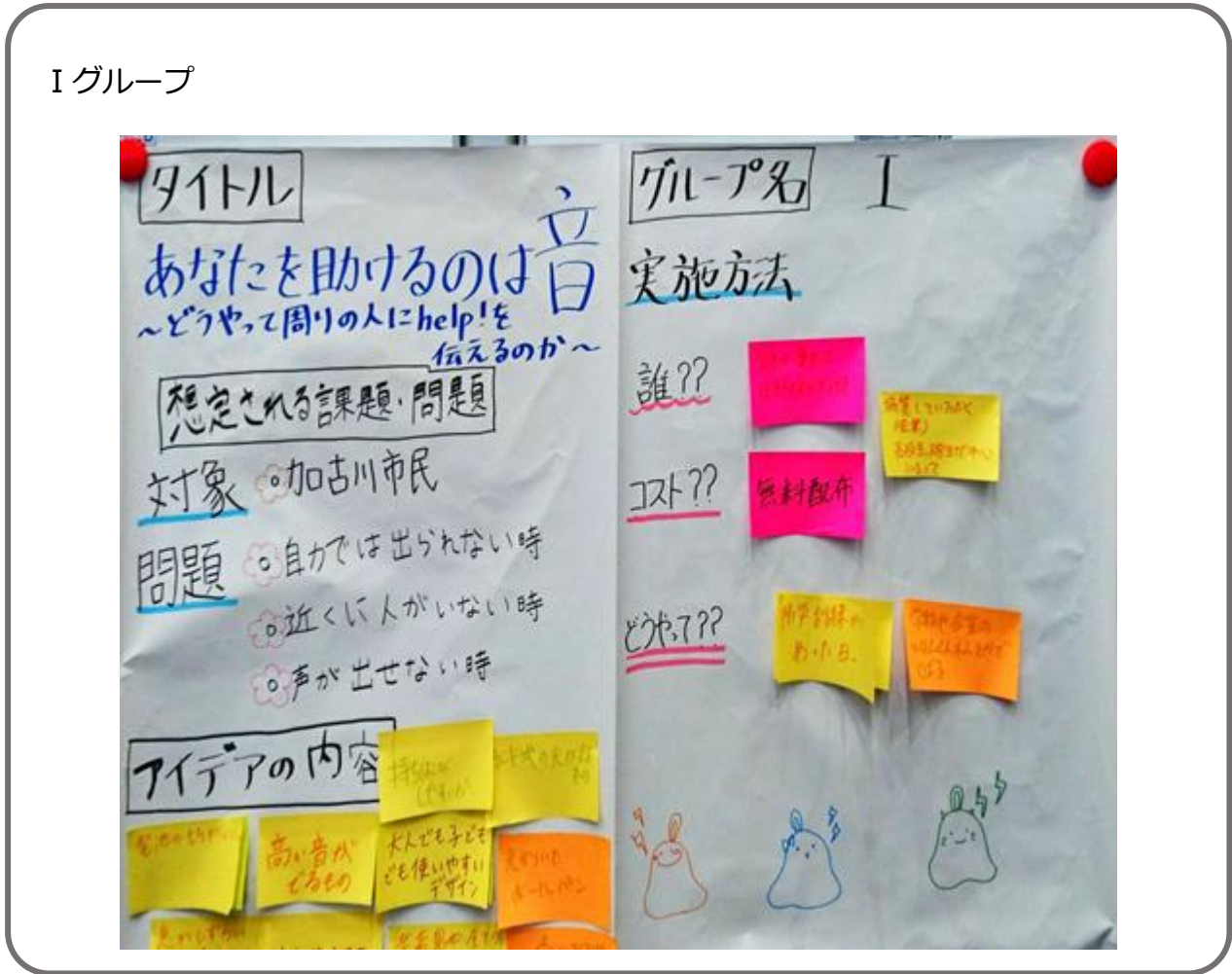
というアイデアが提出され議論を深めていった。

私たちIグループの減災アイデアは

- ◆安心だと思いきすぎない事
- ◆避難場所におけるプライバシーの保護
- ◆少ない力で大きな音が出せ、サイズが小さく普段使い出来るデザインの笛を持つ
- ◆地域でコミュニケーションをよくとり連携すること
- ◆物資の公平化

です。

I グループ



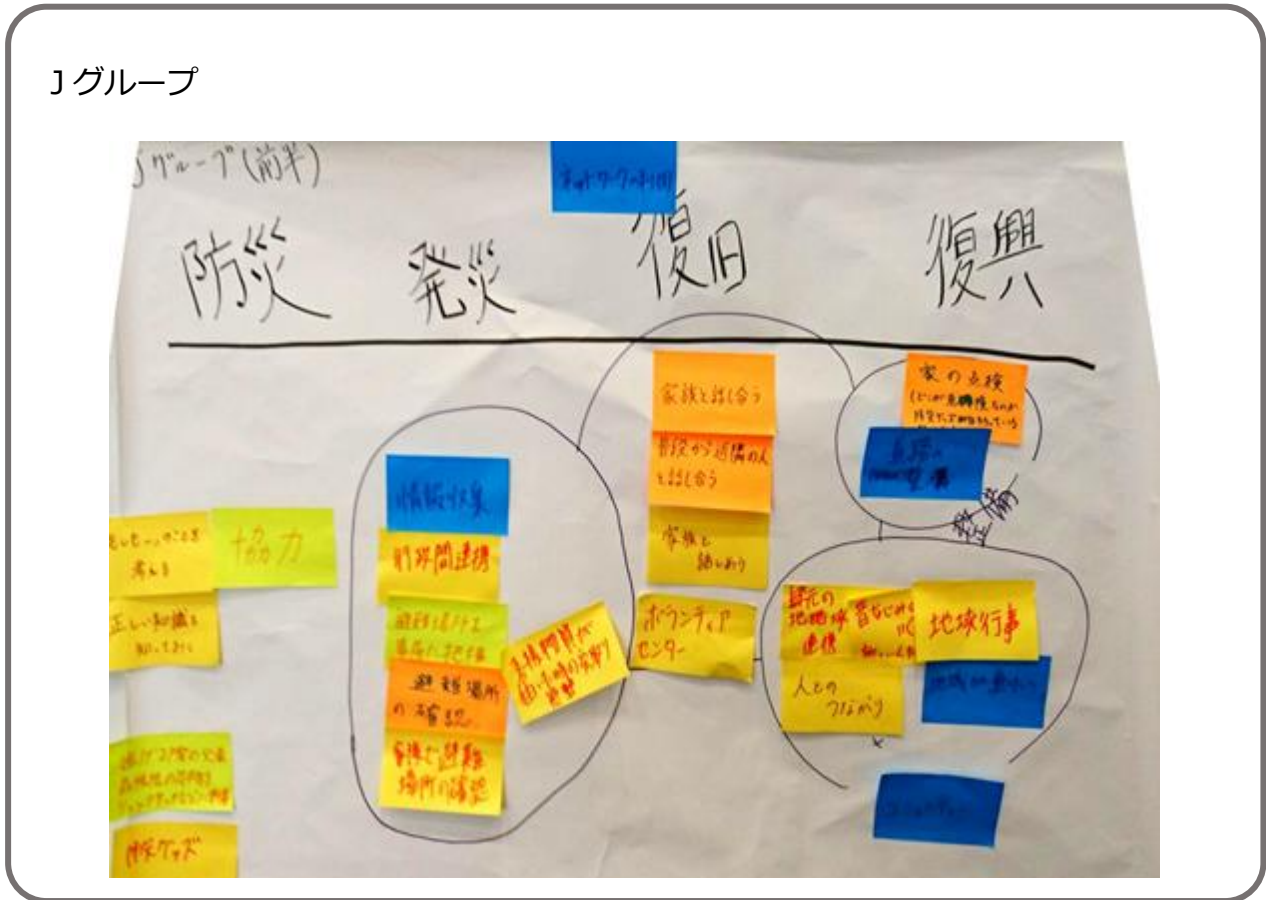
【企画】あなたを助けるのは音 ~どうやって周りの人に help! を伝えるのか~

メンバーで議論を重ねた結果、他のグループではあまり言及のなかった発災段階でのアイデア「助けを求めるための笛」は、かなり特徴的なものであり、これを深めていくこととした。

その結果、「あなたを助けるのは音！～どうやって周りの人に help!を伝えるのか～」というタイトルの下、自力では出られない時、声が届かない時に助けを呼ぶための「笛」を開発し、企業の協賛を得るなどして加古川市民に無料で配布して常時携帯してもらおう企画を案出した。

具体的には、携帯が便利ないようにカード式とする、ユニバーサルデザインに配慮する、防水機能をもつ、高く大きな音を発する、息を吹き込むのが困難な場合も想定しボタンを押すと電子音を発する機能も有する等を、笛の仕様に盛り込むこととした。

Jグループ



【解説】

防災・発災・復旧の各段階における地域コミュニティの重要性を中心に議論が展開された。

減災アイデアとして、コミュニティ関係の構築、道路や家の点検・整備、行政との関係の3つに意見がまとめられた。

<防災段階>

1. 避難する際の荷物をまとめておくこと、もしもの時のことを考え正しい知識を身につけること、普段から家族や近隣と被災したときのことを話し合うこと、避難場所を確認しておくこと等の重要性が指摘された。
2. 家や道路について、どこか危険なところはないか点検し整備しておくことが重要との声もあった。
3. 地域行事を通しての人のつながりの構築が重要である。

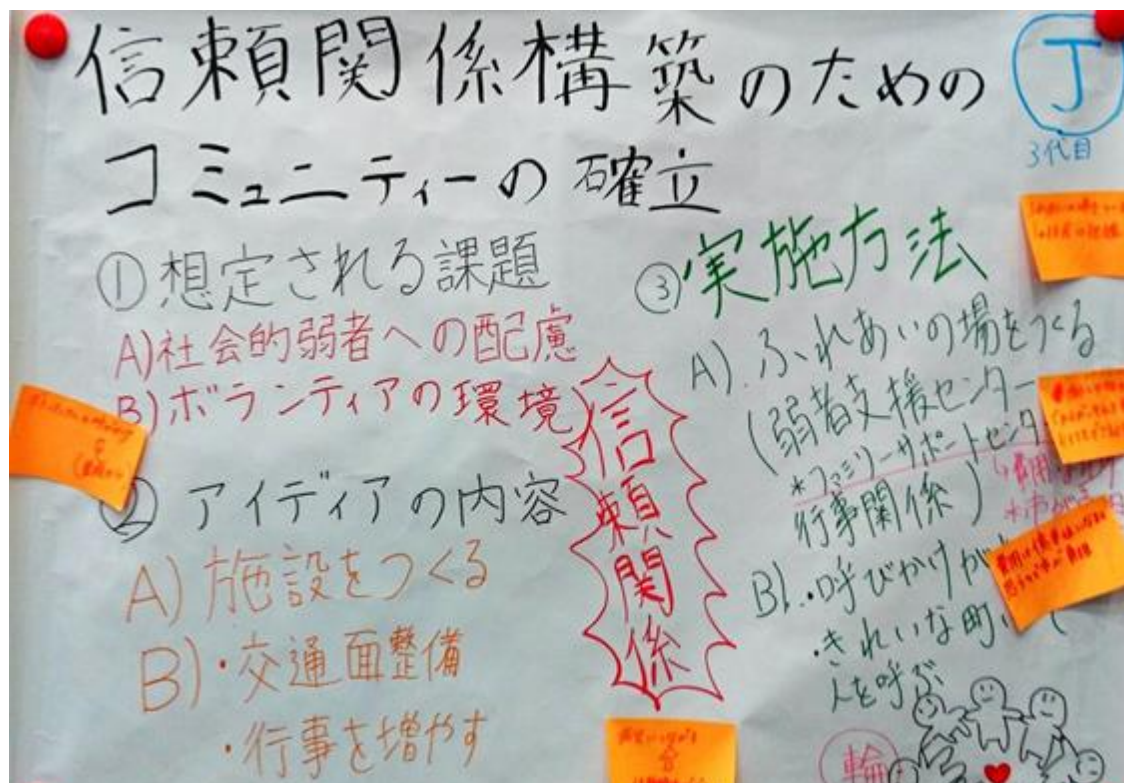
<発災・復旧・復興段階> 行政との連携の重要性や、支援物資が届いたときの分配の難しさについての指摘があった。復旧・復興に至るどの段階においても地域における住民同士のコミュニケーションが重要である。

私たちJグループの減災アイデアは

- ◆コミュニティ関係
- ◆整備
- ◆行政との関係

です。

Jグループ



【企画】信頼関係構築のためのコミュニティの確立

減災のためには地域におけるコミュニティを確立していくことが重要である。日常的なふれ合いを増やすことで地域住民同士の信頼関係を構築することが減災につながる。

例えば、地震が起きた際、重要な課題のひとつになるのは、高齢者や障がい者といった社会的弱者への配慮である。しかし、いざという時に個別のニーズを即座に把握するのは難しい。これに対し、社会的弱者向けのサポートセンターを作り日常的にふれあいの場を作ることで、震災が起きたときにより良い支援ができるのではないかな。

また、地域におけるボランティアの参加を促すための日常的な環境の構築も必要である。このような地域に密着したボランティアの体制を作るため、地域における行事を増やし、それに対する呼びかけを増やすことで、地域を活性化させることを提案したい。こうした行事を通じて、子供から高齢者まで世代を越えたふれあいができることが望ましい。また、実際のボランティア活動を円滑にするため、町をきれいにする・道路を整備する、等も必要になる。